刊行に寄せて

日本の近代化と発展に寄与した医学界の名門、大阪の緒方家は、幕末・明治・大正・昭和の四代にわたり、優秀な人材を生み、育てた。大阪の適塾を創始した、緒方洪庵とその門下生については、梅溪昇博士の『緒方洪庵と適塾生』、『続洪庵・適塾の研究』（思文閣出版）をはじめとし、洪庵の曾孫、緒方富雄博士の『緒方洪庵伝』（岩波書店）など、枚挙に遑がないほど、著作、研究論文、資料紹介がある。緒方家の直系については、洪庵の玄孫、緒方惟之博士の『医の系譜―緒方家五代―洪庵・惟準・銈次郎・準一・惟之』（燃焼社）という、自伝随筆風な家系紹介もある。しかし、惟準の生涯と業績については、自らを詳しく語り、また記することが少なかった、とされていた。継嗣の銈次郎が記した『七十年の生涯を顧みて』のなかで、惟準に関する記事が可成り克明であったこともあって、それが、全体像であるかに理解されてきた。著者は、基礎医学の生理学研究者として、緻密かつ合理的に資料を蒐集し、分析した実体験を踏まえて、惟準に関する未知の資料の発掘とその生涯の行実について独自の切り口で研究を行ってきた。このたび、その成果の大要をようやくまとめることができたのは、医学史研究の同志として大変嬉しい。

岡山大学医学部在任中から手がけはじめ、二十数年の歳月をかけた重みが、その一章・一節からひしひしと伝わってくる。

既知の史実と資料の再調査、分析・確認・未知の資料の探索と惟準門下生の子孫の追跡調査を自らの足と知友、知己の篤い好意ある協力により、致密・正確に行っている。このことは、医学者として培われてきた、未知のものを解明しようとする好奇心と情熱。そして、著者の努力によるものではあるが、生来の誠心・誠意・表裏なく

人に尽すという為人とその行実が、自ずから人を動かした、ともいえる。

執筆のなかば頃から、体調の不良を感じ、入退院を繰り返しながら完稿にこぎつけたという。強靭な忍耐力と、惟準伝にかけた、頑にまで見える執念が、本書の各章・節に、埋め込められている思いがしてならない。その中でも、陸軍軍医時代に惟準の脚気防止の正論がつぶされ栄光の座を去るという、医界名門の御曹司と軍の権力者に阿諛迎合して誤った自説を森林太郎（鷗外）の語学力を使って補強し、自分の昇進を企図した旧代官手代の伴、という低い出自の苦労人石黒忠悳との虚々実々についての実証的な記述からは、著者の惟準への思い入れが強く伝わってくる。実に魅力的で迫力がある。もし、惟準が陸軍軍医陣の中枢にあれば、日清・日露両戦役での膨大な脚気病死兵の発生はなくて済んだはずである、という。この論旨には著者の生来の正義感がよく垣間見える。惟準の晩年のキリスト教入信問題、東京の適塾での門下生たちの動向、その他、惟準をめぐる医師たちをはじめ、緒方一族の人々についての微に入り細にわたる調査結果は、その資料と共に、後進の研究者にとっては大変貴重なものとなる。

著者には生理学の専門著作の他に『岡山大学医学部百年史』（共著）、『岡山の医学』（日本文教出版）、『備前の名医　難波抱節』（山陽新聞社）という医史学の名著もあるが、さらに一書を加えることとなった。日本の近代医学発展史研究者にとって座右の書となり、緒方家ご一族にとっても必携の書となるにちがいない。後世への重要な遺産となる畢世の大著の上梓を心からお祝い申し上げる次第である。

平成二十三年十月吉日

第九代日本医史学会理事長
日本歯科大学医の博物館顧問
医学博士　蒲原　宏

序

緒方惟準は洪庵の次男である。長男整之輔は生後約七か月で死亡、その約一年九か月後に惟準が誕生した。したがって嗣子として育てられるのである。

惟準は自筆の短い不完全な自伝（陸軍を辞める明治二十年ころまで）を残している。また子孫の手には、惟準の次男銈次郎が書写した小伝および自筆かどうか判別できない小伝が残されている。後者は惟準の三男知三郎の長男緒方秀雄氏によって、『緒方惟準直筆の自叙伝原稿について――その紹介と読後覚書』と題して、昭和四十七年（一九七二）七月孔版で発行された。おそらく、配布先は親族縁者の範囲であったと思われる。筆者は、脚気の歴史の研究家として著名な山下政三先生から平成十七年二月に、脚気の歴史の資料とともに、この冊子のコピーを贈与され、初めてその存在を知った。

一方、筆者は昭和四十七年（一九七二）岡山大学図書館鹿田分館（通称医歯学図書館）所蔵の雑誌『医事会報』（緒方病院医事研究会発行）の四七・四八・四九・五二・五三・五四号（明治二十五年八月十五日～同年十月十五日刊）に「緒方惟準先生一夕話」と題して、連載記事の載っていることを知った。読んで見ると、これはまさに、明治二十六年までの惟準の自叙伝である。そこで、筆者は洪庵の曾孫である緒方富雄先生に報じたところ、「この記事の存在を知らなかった」との返事とともに、「将来自分（富雄先生）が惟準伝を執筆するつもりである」との書簡をいただいた。しかし先生は宿願を果たされず他界された（一九八九年）。そのほか緒方家一族の方々にも「惟準伝」を執筆される様子もない。そこで筆者は洪庵夫人八重（億川氏）、すなわち惟準の母の出生地摂津国有馬郡名塩村（現・兵庫県西宮市名塩）に住み、億川家と拙家（浄土真宗寺院）とは親密な関係に

あったので、「惟準伝」を執筆しても許されるのではと考え、『緒方惟準先生一夕話』をもとに筆をとった次第である。

しかし、この『一夕話』の編者が、

会長［惟準］ヲ訪ヒ談此事ニ及ブ、会長徐(おもむ)ロニ自己ノ経歴ニ係ル大概ヲ話サル、固(もと)ヨリ一夕ノ談話ニ過ギザルヲ以テ、其闕略ヲ免レズ、敢テ全貌ヲ写シ出ダスヲ得ズト雖ドモ、今ヤ本報改良ノ最初ニ当リ、曾テ抱負スル所ヲ公ニセンガ為メ、姑(しばら)ク之ヲ此ニ塡メ、併テ他日更ニ全貌ヲ写シ出ダスノ前引ト為スノミ、諸君請ウ、幸ニ編者ガ意ノアル所ヲ諒セヨ。

編者　幹澄識

と記しているように、惟準の経歴の大概であり、闕略は免かれないのはいたしかたのないことである（全文は資料編八〇五～六ページ）。

筆をとりはじめて、惟準の談話を裏付け、あるいは敷衍する資料を探索するうちに、木村吟城編纂『近畿名士偉功伝第一編』（一八九三年）の最初に、「大阪名医緒方惟準之伝」と題して掲載されていることを知った。内容は『一夕話』とほとんどかわらないが、第三者の立場で書かれている。明らかに惟準から提供されたもので書かれている。この筆者は例言の中で「本書は其人より送附せられたる書類又は其人に接し、其経歴の談話を乞ひ、之を筆記したるもの、若しくは信拠すべき人に就き聞知せるものを材料とし、以て之を編纂せるものなれば、事実の正確なるは編者が深く保証する所なり」と述べている。

偉大な蘭学者の父緒方洪庵の衣鉢を継いだ惟準の江戸時代における活動は、西洋医学の修業であり、彼の修得した西欧の近代的医学知識は明治期に入り花を開く。主な業績を時代順に列挙すると次のように考えられる。

(1)宮廷医療への西洋医学の導入、(2)大阪府医学校病院（大阪大学医学部の前身）の創設、関西地方における近代医療および医学教育の基礎の確立、(3)徴兵（撰兵）のさいの医学的検査制度の整備、(4)陸軍兵士の脚気罹患防止の麦飯給与の施行、(5)軍医養成の軍医学舎（軍医学校の前身）の創設と教育の創始、(6)軍務の傍ら東京適塾を開設、医術開業試験受験者の教育、(7)大阪における医学結社「医事会同社」の設立とその機関誌『刀圭雑誌』の発刊、(8)関西地方における最初の近代的・模範的私立総合病院の創設および同院内での産婆（のちに緒方正清が助産婦と改称）・看護婦の近代的養成所の設立、(9)緒方医事研究会の発足と機関誌『緒方病院医事研究会申報』（のち『医事会報』と改称）の定期刊行（大阪の私立病院としては最初）、(10)貧窮民のための慈善病院である大阪慈恵病院の創設（関西地方における最初の組織的福祉医療活動）と医術開業試験受験者のために医学校を併設。

本書では、これらの活動の実態を明らかにするとともに、惟準の修業、惟準と行動をともにした夫人吉重をはじめ緒方家一統、また諸活動に関わった人物を紹介した。なお、著書、校閲本、未刊の著述や講義本、修業時代の翻訳写本類は便宜上、第38章で一括して記述した。

惟準の全貌を把握するには、筆者の力だけではなお不十分であり、本書が惟準および緒方家御一統の今後の研究の入門書となれば幸いである。

執筆にあたり、資料の提供、解読、閲覧などでご協力くださった左記の諸先生・諸氏および図書館・資料館などに対し厚く御礼申し上げる次第である。

赤祖父一知・浅井允晶・梅溪昇（大阪大学名誉教授）・故江川義雄・故緒方裁吉・故緒方富雄・緒方惟之・緒方洪之・緒方洪章・緒方美年・緒方尚紘・岡田弘・奥澤康正・小田晧二・小田康徳・故萱野輝子・川上潤（洪庵記念会）・蒲原宏（元日本医史学会理事長）・古西義麿・酒井シヅ（日本医史学会理事長）・相良隆弘・佐藤允男・故芝哲夫（大阪大学名誉教授）・下山純正（津山洋学資料館長）・城本多鶴子（与謝野晶子倶楽部）・杉田美喜・故杉立義一・高木都（奈良県立医大教授）・田中祐尾・寺畑喜朔（金沢医大名誉教授）・土屋勝彦（長崎大学名誉教授）・故長瀬又男・中田雅博・宮下俊一・森鼻英征・森本信一（つやま自然のふしぎ館館長）・故望月洋

子・守屋乾次・山下愛子・山下政三・横川弘蔵
大阪市史編纂所（中野操文庫所蔵）大阪大学生命科学図書館・大阪府立中之島図書館・岡山大学図書館鹿田分館・加賀市歴史民俗資料館・京都府立医科大学附属図書館・国際日本文化研究センター・武田科学振興財団杏雨書屋・多久市郷土資料館・内藤くすり博物館各位
（五十音順）
末筆ながら、筆者の拙文に対し終始助言をいただき、出版の労をとられた思文閣出版の長田岳士専務取締役と実務担当の田中峰人氏はじめスタッフ一同に深謝申し上げたい。

目　次

刊行に寄せて……蒲原　宏
序
凡例
第1章　惟準の生誕と幼少期……三
第2章　加賀大聖寺および越前大野での修業……九
(1)大野藩の洋学教育……一六
(2)西洋操練の学習……一八
第3章　第一次長崎遊学時代と父洪庵の死……二〇
(1)長崎の医学伝習所（のち養生所、ついで精得館と改称）における伝習……二〇
(2)ポンペの講義……二三
(3)長崎養生所の開設……二九
(4)ポンペの後任ボードインの来任……三六
(5)父洪庵の急死……三七
(6)松本良順の動向……三八

(7)洪哉(惟準)の長崎から江戸への帰還……四〇
第4章　洪哉(惟準)の長崎への再遊……四一
(1)ハラタマの着任……四五
(2)マンスフェルトの着任……四六
(3)緒方洪哉の弁訳したマンスフェルトの講義録『内科察病三法』……五三
(4)聴診器の輸入……五五
第5章　惟準のオランダ留学……五六
第6章　幕府崩壊による惟準の帰国……六六
第7章　朝廷への出仕、典薬寮医師に任命……六九
(1)西洋医学所の状況と松本良順の動向……七〇
(2)天皇の脈(天脈)を診る……七三
(3)明治天皇の東京への行幸……七九
第8章　浪華(大坂)仮病院の設立とボードイン……八一
(1)ボードインと惟準の診療と講義……八三
(2)病院での治療……八四
(3)芳村杏斎筆録の「抱氏外来患者配剤記」「抱氏方剤書」および「抱氏入院患者方剤録」……八六
(4)ボードインの講義……九五

第9章　大村益次郎の遭難とボードイン・惟準らの治療……一一一
(1)事件の経過……一一一
(2)初期の治療……一一三
(3)緒方惟準の後年の述懐……一二四
(4)大阪への移送、右大腿切断、その後の経過……一二八
(5)後日譚……一三六
第10章　大阪軍事病院の創設と大阪府医学校病院のその後……一四二
(1)大阪府医学校病院のその後の推移と人事……一四五
(2)軍事病院へのブッケマの着任……一四六
(3)『撰兵論』の内容……一五二
第11章　東京在勤時代……一五五
(1)明治天皇拝診……一五五
(2)軍医寮創設のころ……一五六
(3)台湾の役……一六一
(4)東京医学会社の設立……一六四
(5)緒方洪庵先生祭祀と招宴……一六六
(6)検閲使随行……一七四
(7)第二回適塾同窓会の開催……一七六

第12章　惟準の西南戦争従軍……一七九
(1)軍団病院での活動と戦況の推移……一七九
(2)佐野常民と博愛社(のちの日本赤十字社)の設立……一八七
(3)緒方惟準と石坂惟寛との出会い……一九〇
第13章　再び東京勤務(陸軍本病院・文部省御用掛兼勤)……一九九
第14章　大阪鎮台病院長時代……二〇二
(1)医事会同社の設立と『刀圭雑誌』の刊行……二〇二
(2)金沢医学所長田中信吾の惟準訪問……二〇五
第15章　医事会同社の設立と『刀圭雑誌』の発刊……二一〇
(1)『刀圭雑誌』第壱号……二一〇
(2)医事会同社における惟準の活動……二一六
(3)脚気患者療養所選定と軍医長会議……二一八
第16章　東京適塾における門弟育成……二二〇
(1)東京適塾門人録……二二一
(2)新出の東京・大阪の適塾「生徒姓名簿」……二二六
(3)講義録『眼科闡微』……二二七
(4)東京適塾門人の略歴および追憶談……二二九
(5)大阪適塾の門人……二四三

(6)「緒方義塾」の規律と塾律について……二四五
第17章　陸軍軍医監兼薬剤監に昇任……二四九
(1)陸軍軍医監昇任と上京……二四九
(2)金沢病院大聖寺分病院開院式に出席……二五二
(3)陸軍軍医本部主催の親睦会……二五六
(4)朝鮮の壬午の変(壬午軍乱)と日本公使館焼き打ち事件……二五七
(5)会旧社と偕行社……二五九
(6)陸軍軍医本部長林紀の死去と松本順の陸軍軍医本部長再任……二六〇
(7)医事会同社の盛衰……二六二
(8)東京陸軍病院長を兼任……二六四
第18章　『日本薬局方』編纂事業と母八重の死……二六六
(1)医務局の創設と『日本薬局方』の制定……二六六
(2)『日本薬局方』編纂委員の任命……二六九
(3)惟準の母八重(洪庵夫人)の死去……二七二
(4)各地で医会設立の動き……二七九
第19章　陸軍軍医学舎長兼近衛軍医長に就任……二八〇
(1)陸軍軍医学舎について……二八〇
(2)教官の略歴と講義録……二八二

(3)軍医学舎長緒方惟準の『陸軍医務沿革史』の講義……二九〇
第20章　近衛歩兵隊への麦飯給与と脚気予防……二九四
第21章　海水浴奨励と大磯海水浴場賞讃……二九七
(1)大磯海水浴場の開設と松本順……二九七
(2)松本順口述「海水浴法概説」(一八八六年／国立国会図書館蔵)……三〇三
第22章　日本赤十字社および東京慈恵医院の運営に参与……三〇五
第23章　惟準の陸軍退官とその真相……三〇八
第24章　陸軍内部の脚気問題と惟準……三一四
(1)惟準の脚気予防報告……三一四
(2)大阪鎮台での麦飯給与……三一六
(3)石黒忠悳の脚気病因説……三一八
(4)海軍の脚気対策と高木兼寛……三二〇
第25章　私立緒方病院の創設……三二三
(1)洪庵翻訳の『医戒』上梓……三二三
(2)緒方病院の発足……三二五
(3)大阪医会の設立……三二九
第26章　緒方病院医事研究会の発足と会誌の発刊……三三三
(1)『緒方病院医事研究会申報』第壱号について……三三五

(2)『緒方病院医事研究会申報』第一号(実質的には第二号にあたる)について……三四二
(3)『緒方病院医事研究会申報』を『医事会報』と改称……三四六
第27章　貧民病院設立の企図と挫折……三四七
(1)貧民病院設立の企図と挫折……三四七
(2)惟準の長男整之助の死去……三五一
(3)惟準が大阪医会会長を辞任……三五二
(4)洪庵夫人八重の墓碑建立……三五三
第28章　大阪慈恵病院の創設……三五五
(1)大阪慈恵病院医学校の開校式……三五九
(2)附属医学校の運営……三六一
(3)大阪慈恵病院および附属医学校の後日談……三六七
(4)私立関西医学院の開設……三七一
第29章　『一夕話』終了――明治二十二～二十六年までの事績――……三七三
(1)緒方一族子弟のドイツ留学と大日本私立衛生会総会および日本医学会の開催……三七三
(2)流行性感冒の流行……三七八
(3)ドイツのコッホ博士発明のツベルクリンの反響……三八一
(4)惟準の叙勲……三八三
(5)収二郎・正清の帰朝と産婆教育所の開設……三八四

(6)惟準の門弟教育・自著の総括……三八五
第30章　緒方一族および緒方病院の動向――『一夕話』以後(明治二十五年～)――……三八九
第31章　緒方洪庵の贈位奉告祭と祝賀会……四四五
第32章　惟準のキリスト教入信と臨終……四五九
第33章　惟準の剖検および葬儀……四七二
第34章　惟準ならびに緒方一族の墓碑……四八二
第35章　惟準死後の緒方病院と緒方家一族……四八六
第36章　惟準の家族と緒方一族……五一六
(1)惟準の家族構成……五一六
(2)惟準の妻吉重……五一七
(3)緒方惟孝……五二三
(4)緒方惟直……五三一
(5)緒方収二郎……五三六
(6)緒方重三郎……五四二
(7)緒方拙斎……五四五
(8)緒方正清……五五〇
(9)緒方祐将……五五五
(10)堀内利国……五五六
(11)堀内謙吉……五八〇
(12)緒方整之助……五八二
(13)緒方銈次郎……五八四
(14)緒方準一……五九二
(15)緒方安雄……五九二
(16)緒方富雄……五九二
(17)緒方知三郎……五九三
(18)緒方章……五九五
(19)深瀬仲麿……五九六
(20)緒方鷺雄……五九七
(21)緒方郁蔵……五九八
(22)緒方郁蔵の妻と子供……六〇一
(23)緒方太郎……六〇二
(24)億川(岸本)一郎……六〇三
第37章　緒方惟準の周辺の人々……六〇七
一　長崎遊学・オランダ留学時代……六〇七
(1)松本　順……六〇七
(2)松本銈太郎……六一三
(3)長与専斎……六一六
(4)池田謙斎……六二〇
(5)長崎遊学時代の緒方惟孝(城次郎・四郎)の後見人太田精一……六二四
二　朝廷出仕・第一次東京在勤時代……六二九
(1)高階経徳……六二九
(2)前田信輔……六三〇
三　大阪府医学校病院時代……六三二
(1)三崎嘯輔……六三二
(2)三瀬周三……六三五
(3)長瀬時衡……六三七
四　惟準の離任後の大阪府医学校病院の人々(医師・職員たち)……六四五
(1)大阪府医学校病院の大学への移管……六四五
①岩佐　純……六四五
②林　洞海……六四九
③横井信之……六五一
④相良元貞……六五三
⑤永松東海……六五四
⑥松村矩明……六五五
⑦石井信義……六五七

(2)大阪府医学校病院奉職の地元の医員……六六二
森鼻宗次……六六二
五　西南戦争、陸軍軍医本部勤務時代……六七二
(1)林　紀……六七二　(2)石黒忠悳……六七六
(3)橋本綱常……六八一　(4)小池正直……六八八
(5)足立　寛……六九〇　(6)佐藤　進……六九三
(7)桑田衡平……六九八　(8)土岐頼徳……六九九
(9)高木兼寛……七〇三
六　緒方病院設立以後の交遊人物……七〇七
(1)高橋正純……七〇七　(2)高橋正直……七一一
(3)高安道純……七一三　(4)山田俊卿……七一八
(5)吉田顕三……七二〇　(6)吉益東洞……七二八
(7)清野　勇……七三〇
七　緒方洪庵の墓碑銘の撰者……七三四
(1)古賀謹一郎……七三四　(2)草場珮川……七三七
第38章　著書・翻訳書・講義録写本・校閲本・論文・墓碑銘など……七四二

資料編

(1)「緒方惟準先生一夕話」の編者幹澄の緒言……八〇三
(2)大阪医学館規則……八〇四
(3)『大阪府布令集』より抄出の医事関係の布令……八〇八
(4)東京医学会社発刊の『医学雑誌』……八一二
(5)海水浴の説(医事会同社の第七会における緒方惟準の演説の抄録)……八一六
(6)本邦ニ一定ノ局方ナキハ医道ノ欠典(ママ)タル説……八一九
(7)大阪興医学社附属教場規則……八二二
(8)陸軍医務沿革史……八二九
(9)近衛歩兵隊麦飯給与試験成績第一回報告……八四八
(10)脚気病予防ノ実験……八五六
(11)大日本私立衛生会第七総会における緒方惟準の祝辞……八五九
(12)緒方病院医事研究会規則(明治二十五年七月改正)……八六三
(13)死直前の福沢諭吉の緒方洪庵先生に関する談話……八六七
(14)洪庵文庫設立の経緯……八七六
(15)大村益次郎殉難報国之碑の竣工式と碑文……八七九
(16)緒方惟準の長男整之介および弟収二郎(在ドイツ)宛書簡……八八一

⑰緒方惟孝の収二郎（在ドイツ）宛書簡五通……八八五
⑱緒方八千代（拙斎夫人）より収二郎宛書簡一〇通……八九七
⑲緒方惟準の佐藤進宛書簡一通……九〇三
⑳緒方収二郎（在ベルリン）から森林太郎（鷗外）宛書簡　明治二十二年七月七日付……九〇五
緒方惟準および関係年表……九〇七
あとがき……九四五
参考文献一覧……51
掲載図版一覧……39
索引（人名・事項）……3

凡　例

一、本文引用資料について（　）付きのルビと傍注および［　］付きの補注は筆者が新たに付したもの。

一、緒方秀雄氏が孔版で発行した『緒方惟準直筆の自叙伝原稿について』と『緒方惟準先生一夕話』を比較検討してみると、後者は前者の記述をほとんど網羅し、より詳しい内容である。そこで『緒方惟準先生一夕話』（以下『一夕話』と略記）を中心として記述を進め、引用部分は点ケイで囲み本文と区別した。

一、『一夕話』の文章は、できるだけ原文を改変しないようにしたが、理解しにくい単語や熟語にはルビ（丸カッコ付き）、解釈（［　］付き）を付した。原文二行割り書き部分は一行とし〈　〉でくくった。

一、『一夕話』には西暦は記入されていないが適宜記入、句読点も全くないので、筆者が付した。

一、地名「大坂」「大阪」の使い分けについて。

本書では、原則として江戸時代の記述については大坂を用い、明治元年（慶応元年九月八日、明治と改元）以降は大阪とした。しかし固有名詞化している名称については大坂としたところもあるので諒承されたい。

公的には慶応元年（一八六八）八月に太政官から「大阪府印」という官印が下附されて以来、大阪府の名称が用いられることになった（伊吹順隆『大坂と大阪の研究――官印と公文書を中心に――』、私家版、一九七九年）。しかし上意下達の中央政府の一方的押しつけは浪華の庶民に馴染まず、心ある人たちは明治初期以降も大坂の名称を長く使用し続けたのである。ちなみに、大阪で最初に発行された医学専門雑誌『刀圭雑誌』（第一巻の刊行は明治十一年十一月二十五日）の出版社（刀圭雑誌社）は一号～一四号（明治十二年四月二十五日刊）までは住所を大坂伏見町四丁目四番地とあるが、一五号（同年五月十五日刊）からは大阪を用いている。

あとがき

この緒方惟準伝をワープロに最初に入力したのは、平成十八年六月十一日で、約三年半後の平成二十一年にほぼ脱稿したが、なお不完全であった。これを思文閣出版に相談し、この伝記の第一・第二章の初校を受け取ったのは平成二十一年十一月二十一日であった。しかし、入力を開始して二か月後の八月初旬に血尿があり、診察を受けたところ悪性腫瘍との診断で翌日入院、治療を受ける身となった。幸い経過良好で一か月後に退院、執筆活動を続けることができたが、再発し、放射線治療をうけ今日におよび、なんとか出版の日を迎えることができそうで、喜びにたえない。

しかし惟準伝の出版にご理解をいただき、緒方家に関する諸種の写真や惟準の母方の祖父母億川百記と志宇の写真、緒方銈次郎の『七十年の生涯を顧みて』などを貸与してくださった緒方裁吉様が平成二十一年九月に逝去され、本著をお目にかけることができなくなったことは痛恨のきわみであった。拙著を故裁吉様のご霊前に捧げたいと存じます。

平成三年三月、岡山大学を離れ、一民間人となり、今まで身近かであった医学図書館を気易く利用できなくなったことが、執筆にあたり最も大きな弱点であることを知らされた。現役時代に緒方家関係、大阪地方医事、著名医家の略伝、死亡記事を岡山大学医学部図書館でコピーをしたが、いざ執筆してみると不十分なのに気付いた。近くの古い大学といえば、大阪大学と京都府立医科大学だが、拙宅から最も近い大阪大学の生命科学図書館（医学部図書館の後身）には『緒方病院医事研究会申報』や後身の『医事会報』は一冊もなく、また古い医学雑誌も案外少なく不便であった。

大正六年（一九一七）二月十九日、北区常安町にあった大阪府立医科大学（大阪大学医学部の前

身）病院本館から出火し、三階建て病院全部（三〇〇〇余坪）および校舎は二、三の教室を残して焼失、標本・書籍類・ラジュウム・X線装置など総て焼失したと報道された（『東京医事新報』一〇一二号、一九一七年）。この火災の原因は、付添看護婦がアルコール灯を転倒し床上に流れたアルコールの発火によると報道されているが（裁判で一〇〇円の罰金、しかし不服として控訴）、医学雑誌以外の大学の貴重な歴史資料が烏有に帰したことは明らかである。この火災がなければ、明治初期の大阪地方医事や惟準に関する多くの医学資料を利用できたのでないかと悔やまれる。また昭和初期に緒方病院が廃院となり、多くの細かい文書類が散逸してしまったことも残念なことである。

そこで京阪神地区で開かれる古本展には寒暑を問わず毎回足を運び、また送られてくる古書店目録には必ず目を通し、惟準伝執筆に関連すると思われるものは、金銭を惜しまず入手した。惟準の直筆の掛軸や短冊を是非入手したいと思ったが果たせず、幸い緒方拙斎の書幅を入手することができ、また惟準の自筆と推量される稿本『陸軍医務沿革史』を掘り出し、資料編に収録することができた。さらに、大阪の洪庵の墓碑銘を撰した草場佩川の画幅を京都の古書店で偶然入手し、その後、佐賀市で開催された日本医史学会総会に出席の途次、佩川の生誕地多久市を訪れ、彼の生家跡碑・墓碑、彼の作品を多数所蔵する多久市郷土資料館を訪問できたのは、懐かしい思い出である。

また、大阪の明治時代の著名な医師、堀内利国・高橋正純・吉田顕三・高安道純・山田俊卿・森鼻宗次の墓碑を探し、碑文を写しとった苦労も思い出として懐かしい。

序で多くの方々に謝意を記したが、とくに梅溪昇先生は古文書解読にさいし、いつも快くお引き受けくださり、ときには浅井允昌先生にも助けていただき、また漢文の専門家である岡田弘先生からは、洪庵墓碑銘などの解読、先人の誤写の指摘など、御教示を頂くことができた。

上中啓三（筆者の現住地西宮市名塩生まれ）の「アドレナリン実験ノート」の発掘でかねてより知り合っていた山下愛子先生は、自発的にたびたび国立国会図書館へ足をはこび、惟準関係の著述を閲覧し、そのコピー送って下さり、時には筆者を同館へ案内していただいた。洪庵記念会川上潤氏からは『緒方婦人科病院総覧』・『助産婦之栞』第壱号・緒方正清『浴療新論』の全文コピー、山下政三先生から大部の脚気問題関係資料、つやま自然のふしぎ館の森本信一館長からは芳村杏斎の全関係古医書および文書の貸与、寺畑喜朔先生から緒方病院の記念絵葉書、赤祖父一知先生からは適塾門人田中信吾の肖像と関係資料、横川弘蔵先生からは現存する唯一の「大阪慈恵病院の職員・生徒の集合写真」、さらに実兄蒲原宏からオランダ・ドイツ人医師の略歴その他の資料の提供および索引の作成に協力を受けたのは有り難かった。そのほか多くの医学史・洋学史および歴史研究者諸氏の著書を利用させていただき、衷心から深く感謝申し上げる次第である。

平成二十三年二月

著　者

〔追記〕本年二月下旬、筆者は膀胱・前立腺の全摘手術のため一か月半入院、五月下旬には頭部に外傷、重ねて八月下旬、老妻が転倒により左大腿骨の骨折、入院などが続いた。そのため校正の作業が停滞し、出版が遅れることになり、関係者に深くお詫び申し上げます。

なお末筆ですが、数年にわたり筆者の病気を治療して下さった宝塚市立病院泌尿器科の医療スタッフ、摘出手術を施行していただいた京都府立医科大学泌尿器科教授三木恒治先生と主治医藤原敦子先生および医療スタッフの方々、手術の仲介の労をとって下さった中橋彌光先生に深謝致します。

（平成二十三年八月三十日記）

◎著者紹介◎

中山　沃（旧姓　蒲原）

大正14年５月16日，新潟市に出生．
昭和24年３月，新潟医科大学卒業．昭和24年３月，米子医科大学助手．昭和26年４月，鳥取大学医学部助手．昭和28年６月，鳥取大学医学部講師．昭和29年７月，医学博士．昭和29年11月，鳥取大学医学部助教授．昭和32年１月，岡山大学医学部助教授．昭和37年11月，文部省在外研究員（ドイツ，ゲッチンゲン大学）．昭和45年４月，岡山大学医学部教授．昭和61年４月７日，中国吉林省延辺医学院名誉教授（第１号）．平成３年３月31日，岡山大学定年退官．同年４月１日，岡山大学名誉教授．
日本生理学会特別会員，日本平滑筋学会名誉会員，日本医史学会評議員，洋学史学会会員，適塾記念会理事（大阪大学）
〔主な著書〕
『備前の名医難波抱節』（御津町，2000年），『岡山の医学』（日本文教出版，1971年），その他分担執筆・論文多数．

緒方惟準伝――緒方家の人々とその周辺――

2012（平成24）年３月30日発行

定価：本体15,000円（税別）

著　者　中山　沃
発行者　田中　大
発行所　株式会社　思文閣出版
〒605-0089 京都市東山区元町355
電話 075-751-1781（代表）

印　刷
製　本　亜細亜印刷株式会社

©S. Nakayama
ISBN978-4-7842-1563-8　C3023